



# 心 の こ ろ 話



# 目次

● 第1話 縁結びのお地蔵さん

下安田



……

1

● 第2話 お針塚（縫塚）

羽崎



……

4

● 第3話 熊堂のお地蔵さま（岩永比咩命）能堂



……

7

● 第4話 お経塚

今市



……

9

● 第5話 船着場跡

磯部島

……

11

● 第6話 盤持ち石



磯部島

13

● 第7話 人柱地蔵



松岡領家

15

● 第8話 お殿様と湧き湯



四郎丸

17

● 第9話 歯痛治療の木



四郎丸

20

● 第10話 不動塚(鎧塚)



今市

22

● 第11話 乳もらい地蔵



八丁

24

● 第12話 南横地八幡神社（斉藤成弥氏）

南横地



27

● 第13話 追分地蔵

北横地



30

● 第14話 一里塚

北横地



32

● 第15話 お侍と表児の米

北横地



34

● 第16話 おますさん

北横地



36

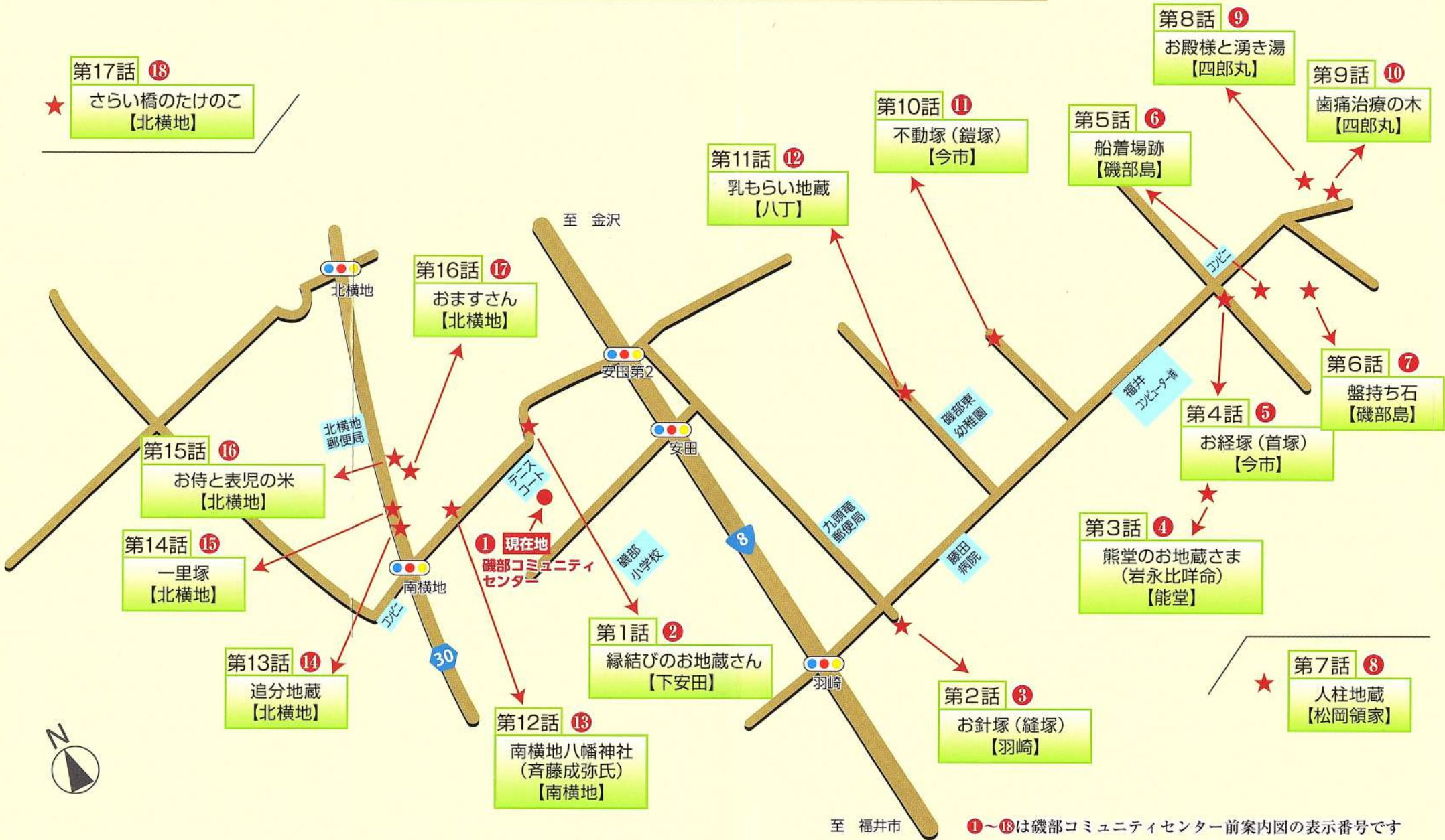
● 第17話 さらい橋のたけのこ

北横地



39

# いそべむかし話 言い伝え案内図



看板番号②

# 縁結びのお地藏さん（南無観世音大菩薩）

〔下安田〕

安田神社から南東500mのところに、白山堂と呼ばれているお堂があったんやと。

ある日、酒に酔ったおさむらいさんが通りかかると、「私を連れていっておくれ」という声が聞こえてきたんやとの。

おさむらいさんがあたりを見まわしたけれど、観音様の他には誰もしないならので、「お望みとあらばいたしかたなし。よっこらしよ」と背中なかに負おうて歩あるきだしたんやと。

おさむらいさんは「こりゃえらいものを背負せってしまっただなあ」と思いながら下安田村のはずれまで来たんやけど、あんまり重おもとうて疲つかれてもて、「観音様かんのんさま、ごめんなさいよ」と言ってその場に放ほうり出だし、す

たこらさつさと称念寺の方へ歩いて行ってしもたんやと。

その後、村はずれの墓地のそばに捨ててあった観音様を見つけた村人たちは、「もったいないことやの」と言っってそこに小さなお堂を建ててお祀りすることにしたんやとの。その頃、なんでかしらんけど、この村には夫婦の中途別れが多かったんやと。

ある日、夫と死別して悲しんでいた嫁が観音様にお参りしていると、「お前も一人になってさみしいんか。私もこんな村はずれにさみしくずっと一人でいるんや。村の中に入れておくれんか。」という声が聞こえてきたんやと。そのことを村人たちに話すと、「どうしたもんやろの。村の中へお入れするか、どこぞへお移しするか、占ってもらおうやねえけの」ということになったんやわの。

修行僧に頼んで村の人たちの前で護摩を焚いて占ってもらったら、「村の中へ入りたい」ということになったので、村人は協力しあって村の中央に石のお堂を建ててお参りすることになったんやと。

すると不思議なことに、その後夫婦の中途別れがすっかりなくなり、ともに白髪が生えるまで健康で長生きすることができるようになって、今でも夫婦円満・不老長寿を祈願してお参りする善男善女に固き契りを約束し、そのご利益はありがたく報われているんやと。有りがたいことやの。

現在も年に二度お正月と秋の祭礼の時にご開帳されているんやと。





看板番号③

# お針塚（縫塚）

【羽崎】

お針塚と聞くと針供養かなと思われませんが、この塚は、明治時代に生きた谷口たまさんという女性の偉業を讃えるために、たま先生がまだ28歳の頃、卒業生、現塾生、そして多くの人々によって建立された生き塚です。

たま先生が十七、八の頃、父親が亡くなり、親戚等も少ないために母親の実家である羽崎の吉田家に身を寄せることになりました。福井で習っていた和裁等を教える仕事を吉田家の前の蔵の中で始められました。

その頃は、5、6人ほどだったのですが、次第に生徒が増えて来たため、隣の土地に平屋を





建てて本格的に塾にすることになりました。

お針ごとというを着物の仕立てが一般的でしたが、和裁の他、やさしい洋裁や、今でいうパッチワークや押絵など手芸全般にわたり教えていたそうです。そのため、3日と空けず福井まで堤防を歩いて材料を調達に行っていました。

書道もすぐれた方であつたようで中垣内さんも学校が休みになると裁縫の他、お習字を習いに行かれていました。周囲の友だちから大変うらやましがられたそうです。

作法についても厳しいものがあつて、嫁入り前の娘さんたちにとっては是非習いたくて、春江、上久米田、吉政、下森田方面など遠くからも生徒が集まってきました。お歳暮、年始など塾の行事は色々で行われ、特にお正月に行われる小倉百人一首は本当にすばらしく、たくさんの娘さんたちが高品な遊びの一つで作法と思う程立派なもの

だったそうです。

昭和15年頃、太平洋戦争が始まる頃には70歳を超え、女学校へ通う娘さんたちも多くなり、生徒も少なくなったので長く続いた塾も閉鎖し、近くに身内もいなかったため孫のいる神戸へと引越させられた。

引越された後、まもなく亡くなられましたが、谷口たま先生が残した偉業は『縫塚』とともに語られています。

お話を聞いてこの碑をもう一度見ると、お弟子さんの名前がぐるりと100名以上刻まれており、「縫塚」という字を書かれたのが福井県知事村純九郎閣下となっています。

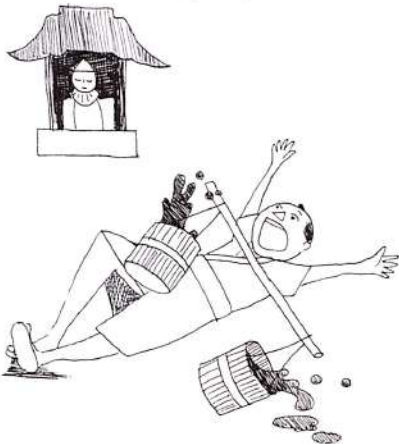


## 熊堂のお地蔵さま（岩永比咩命）

熊堂

昔、上志比村の石上というところに岩永比咩命が祀られていたんやと。神様に対して失礼なことをする人を大変嫌い、失礼なことをするのを見ればただちに罰を与えていたそうなんやわの。

それがなんでかしら担桶肥を担いで神様の前を通ると縄が切れてあたり一面肥だらけになったり、勝山の殿様が福井に行く途中通りかかると必ず馬から転げ落ちてしまうので、村の人たちとうまくいかんと嫌われてしまい、また恐れられ、とうとう安永という約240年ほど昔に九頭竜川に沈められてしまったんやわの。そして、流れ流れて、熊堂の「堂の口」に辿り着いたんやと。



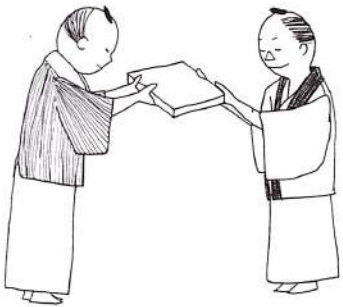
ある日、荒川太右エ門という村人の夢に現れて「私を引きあげて  
ください。」とお告げがあったんで、村人たちは川から担いで今の八幡  
神社の所まで運んだところ、今まで軽かった神様が、急に重くなり  
動かせんようになったんやと。

それで、村人はその所に、岩永比咩命を祀ることにしたんやと。

熊堂の人たちはとても信心深く岩永比咩命を大切にお守りしたん  
で、岩永比咩命は大変喜び、村はとても潤ったんやと。

それを伝え聞いた石上の人がうらやましく思い、岩永比咩命を返して  
欲しいと言ってきたんやけど、もう村の神様だから返すことはできない  
と断ったところ、あまりに熱心に頼むんでかわいそうに思い、台座だ  
け返したんやと。

だから熊堂のお祭りは、月の  
前半、石上のお祭りは月の後半  
になったんやと。



## お経塚

『今市』

昔々、こいら辺一帯は、天台宗信仰の土地だったんやわの。信仰す  
 れども日々の生活は苦しく、何の希望もない日々を送っていたんやとの。  
 ところが、ある日、修行をしなくても「南無阿弥陀仏」と唱えれば、  
 農民であろうが誰でも極楽浄土にいけるといっててもやさしい蓮如上  
 人の教えが広まり、浄土真宗に改宗することになったんやと。改宗  
 した証に天台宗の経文を集めて埋めたとされ  
 たのがお経塚やわの。  
 本当に埋めてあるのか一度掘り返してみよう  
 という話も有ったんやけど、ロマンが無くなる  
 というのでそのままになったそうやわの。



またお経塚は別名首塚とも言われてるんや。

上納米の取立てが大変厳しくなり、収められないとその土地から労働者を差し出すというきまりがあり、大変苦しい日々を送っていたそうやわの。

となりの石川県では一向一揆を起し、農民達でその地を治めることができたことを聞き、磯部地区でもお坊さんの扇動で一向一揆がおきたんやと。福井の中角から上志比までの布陣となったということやわの。

一揆に参加した農民のほとんどが殺されてしまったんやわの。舟橋の先の方まで血の海になったんやと。手柄の証として首をはね、耳を切り取り数珠繋ぎにしたんやと。残された首を埋めたのが今の首塚やとの。

首謀者であるお坊さんたちは、石川県の方に去ったそうやわの。



看板番号⑥

# 船着場跡

〔磯部島〕

春近用水がまだ下合月と坪ノ内地籍の裏九頭竜川からひかれていたころの話やけど（今は四郎丸の閘門で十郷用水から分水）、春近用水は流通の基盤だったそうやわの。

川幅もでっかくて今よりも4倍以上もあったんやと。

昔は今のようないまごやしかなかったんで、田んぼのこやしとなる石灰を勝山の坂東島地区から運搬して来たんやと。

磯部島の橋が船着場になってて、6間もあるでっかい舟が行ったり来たりしていたんやと。舟大工を生業としていた家もたいぶあったらしんやわの。

また磯部地区内でとれたお米は熊堂の船着場から三国に運び、三国





の元締めが買占め、  
大阪方面などに運んでいたらしんにやわの。

看板番号⑦

# 盤持ち石

【磯部島】

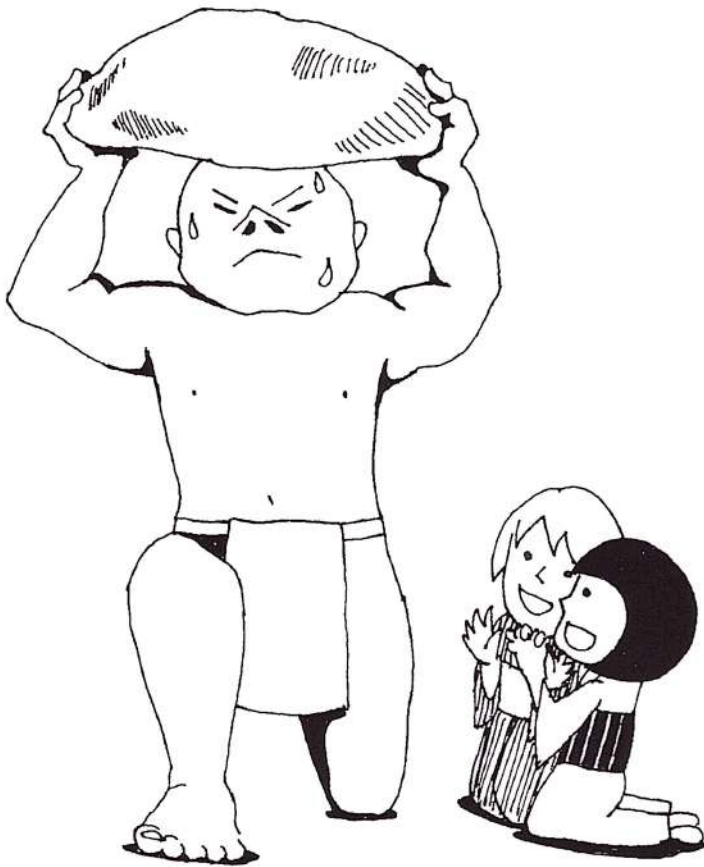
昔むかしは今いまのように遊ぶあそぶところや機会きかいが多くありま  
せんでした。

お盆ぼんなどに盤持ち石ばんもちいしを持ち上げる力ちから自慢大会じまんだいかいや  
音頭おんどとり自慢じまんなどが唯一ゆいいつの娯楽ごらくでした。またそこが  
若い人わかひとたちの社交しゃうこうそして出会いであいの場ばであり、伴侶はんりよを  
見つける場みつけるばとして人ひとが集まる機会きかいとなっていていまし  
た。優勝ゆうしょうすると引き手ひてあまただったようです。

今いまでは考かんがえられませんが、小しょう学校がっこう6年生ねんせい位くらいに  
もなると1俵ひょうの米俵こめだわら（60kg）を抱かかえられたとのこ  
と。抱かかえられると一人前いちにんまえの男おとこと認めみとめられたそうで



す。  
磯部島の区民館にある1個80kg以上ある盤持ち石、あなたは抱える  
ことができますか？



看板番号 8

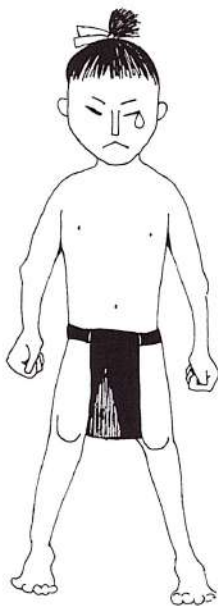
# 人柱地蔵

【松岡領家】

当時の九頭竜川は暴れ川で、毎年5月の雨が降る頃になると必ず溢れひどい被害に遭うたので、そのたんびにもう一度田んぼの開墾を  
しなおすという日々の中で相撲を余興としていたんやけど、この相撲  
にまつわる悲しい言い伝えもあったんやわの。

1789年（寛政元年）6月の堤防決壊は多くの田畑  
を流失し、まっことひどい被害を受け、人々の不安は  
頂点に達してたんやと。

時はお盆16日、相撲をするにあたり、髪  
を束ねる紐が立て結びになったものが人柱  
になろうと話し合ったんやと。ある若者が



ひとぼしり  
人柱にきまり、その若者が毎年必ず相撲をしてくんねの……と人柱  
になる条件をだして、人柱になったそうやわの。  
そのようなことで、故人の冥福を祈り、祠をたて、毎年相撲を催  
したそうやわの。

その言い伝えもいつのまにか忘れ去られ  
てしまい、昭和30年（1982年）ごろに  
は相撲大会もしなくなったらしんやわの。



(人柱地蔵)



(相撲場跡)

## お殿様と湧き湯

〔四郎丸〕

昔、四郎丸のお宮さんの北側の田んぼのあたりにどんなに雪が降ってもそこだけはなぜか積もらないところがあったんやわの。

そこには湯が滔々と湧き出しており、この湯につかるだけで疲れがうそのように消えるとの評判で、毎日の農作業の疲れを癒す人たちの憩いの場所となっていたんやと。

あるとき、お殿様がこの地を通りかかり、ふと横を見ると幸せそうな表情をした農民達が集まっているのを見つけた。

「しあわせそうだな。何かいいことがあるのか？」と、聞くと



「はい。ここはいつも湯が湧き出ていて、この湯につかると毎日の仕事の疲れがとれるのです。ありがたや、ありがたや。」

それを聞いたお殿様は大変怒り、

「百姓の分際で贅沢な！今後一切この湯につかる事はならん！お前らよりこの馬の疲れを取る方がどれだけ大事か…。馬の足をその湯につけ、きれいに洗え！」

と言ったんやと。農民達はあわてて、馬の足を湯につけて「じいじいすり始めたんやわの。」

するとどうでしょう。あんなに温かかったお湯がみるみる氷のようになくなってしまったんやわの。それから二度とお湯が湧くことはなかったんやと。



川端さんがまだ子供の頃、木村さんのお父さんと川端さんのお父さん、今市のシンノスケさんという人が掘って見たんやけど、やはりお湯は出んかったんやと。今から25年位前、酒井さんが丸岡町の助役のころ、川端さんや木村さんが中心となって、もう一度この地をボーリングしてみたんやけど、深く掘れば出たかもしれないが、浅かったせいじゃっぱり出んかったんやわの。





# 歯痛治療の木

【四郎丸】

四郎丸の白山神社が、薬師神社だった頃のお話やわの。

昔は、お医者さんがあちこちにあったわけではなく、また、歯の治療はほとんどできない状態だったんやわの。

そういう中で、神社境内にある椿の葉をかむと歯痛にとてもよく効くというお話が広まり、お薬師さんには行列をつくっておまいりに来る人が絶えなかったということやわの。

川端さんが子供だったころまで、おまいりにこられて椿の葉をちぎって持ちかえっていたそうやわの。

歯科技術の進歩によっておまいりする人もいなくなっただんやと。



看板番号①

# 不動塚(鎧塚)

〔今市〕

不動塚は、今の位置より30m南、30m西にあったそうなんやわの。高さ3mぐらいあり「塚山」と呼ばれていたんやと。150坪ほどもある円墳だったそうやわの。周りには堀があり、その水は、田んぼの用水に利用されていたんやと。冬は、子供たちのスキー場になり、子ども達の楽しい遊び場所になっていたんやと。大人たちは「ここは偉い人がいたところだから塚山ではおしっこをしてはいけない、もしおしっこをするとおちんちんが腫れる」といい、子ども達も言いつけを守っていたそうやわの。

実際、兜や鎧等も見つかり、それなりの身分の武士であったらしんやわの。祠の中にしまっていたんやけど、なくなったり、鑑定に

出したところからかえってこなかったりと現在は残っていないんやと。  
その塚山も、昭和初期に耕地整理のため、今市や磯部島の土を運んだ  
際ならしてしまい、今のところに移動したらしいんやわの。  
この不動塚、磯部七塚の一つに数えられているんやわの。



# 乳もらい地蔵

八丁

このお地蔵様は、昔は団地との境にあったんやけど、土地改良のときに今のところに移されたんやとの。

昔、旅人が森田の上野でお地蔵様を見つけて、背負って持って帰ろうと道中を歩いていたら八丁のあたりでどうにもこうにも重たうなって背負っていられんようになつて、そこに置いてしもたんやとの。

どこからこの話が広まったんかわからんけど、このお地蔵様にお願いとお願いするとお乳がよう出るようになるといううわさが広



まっつての。

その頃はお乳が出ないと子供を育てるのが難しかった時代で、お参りする人が絶えんかったんやと。

ただし、朝早くお参りすることと、お参りした帰り道に誰にも会わなかったらあかんていう約束事があったんやとの。

実際に西岡さんのお母さんが朝早くごはんの支度をしていたら、戸をたたたく音がして出て見ると、「お地藏様のおかげでお乳が出るようになりまして。ほんとうにありがとうございます。うございました。」とお礼を言いに訪ねてきた若い女の人もいたんやと。

このお地藏様は一宮上野の正観音といい、観音様の中でも位の高い観音様やとの。



屋根を銅葺きにしたりお花をあげたりとお世話をされていたのは、  
八丁の北島金太郎さんやったんやと。  
今でも心ある人がきれいなお花をお供えして大事にしてくれている  
んやと。



看板番号 18

# 南横地八幡神社

〔南横地〕

明治の頃はひとつだった神社が、終戦後の昭和23年頃、北横地の神社から南横地と下安田の神社が分かれたそうやわの。

震災後ということもあったんやけど、資材は乏しく倒れた大きな材木をもらい集め、丸岡で製材し下安田の宮大工、※齊藤成弥さんが神社を造られたんやと。

今では約270戸もある南横地やけど、その当時は32〜33戸ほどやったんやわの。自宅さえ倒壊していて大変だったのに親交会（壮年団）の方達の無償の奉仕で力をあわせ南横地の復興にご尽力されたそうやわの。

神社が出来上がったことにより区民の親睦と団結の心を根底に年末



年始のお参りの行事が始まったそうやわの。

昭和50年ごろ区民会館が建つまでおつとめはその年の当番の方の家で行われていたんやとの。

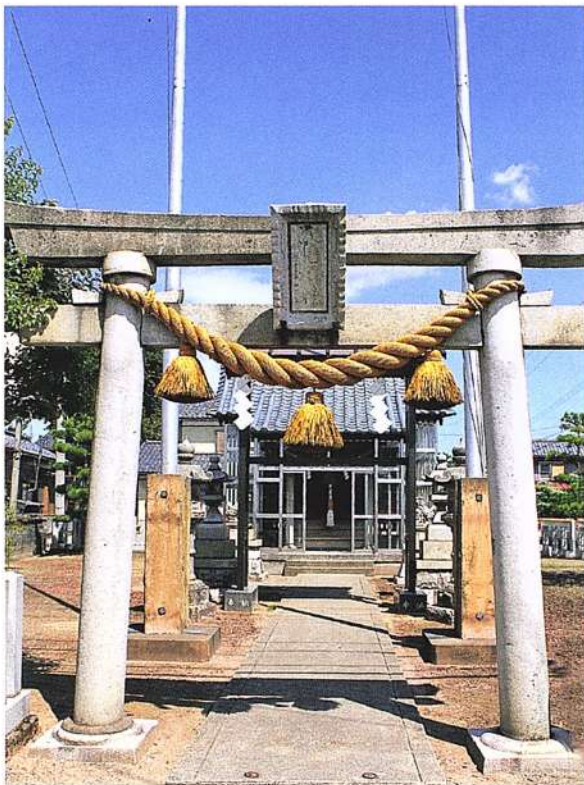
※ 齊藤成弥氏（下安田）は、幼いころより宮大工の修行に励み、16歳のとき、善光寺（長野県）の仁王門建立に参加して以来、全国各地の有名な神社仏閣の建立に携わりました。

設計図のない時代、注文を受けると頭の中に即座に「設計図」を描きました。

主に使った櫓は硬く丈夫な反面、徐々に曲がる欠点を持っていきます。このため、確かな目と経験で曲がり計算して着工。後年、曲がっても計算どおりで、木材の性質を熟知して経時変化を先に読みとる技術が特に鋭く、戸や障子に隙間が生じることは全くありませんでした。暇さえあれば、奈良へ足を運んで正倉院など見

学、古代建築にも造詣が深く技術の向上と研究に努められました。  
柿原の専教寺（真宗三門徒派、古くは真言宗で大連寺と称し  
たが、寛正3年に帰参、多賀谷氏の墓と伝える五輪塔がある）の再  
建には、その技術の巧妙で正確さは福井の宮大工というよりも日  
本の宮大工としての名を残されました。

また、竹田の千古の家の復元には、その精巧さに文部省の技官が  
驚き称賛したそうです。  
（「わが磯部」より）



看板番号④

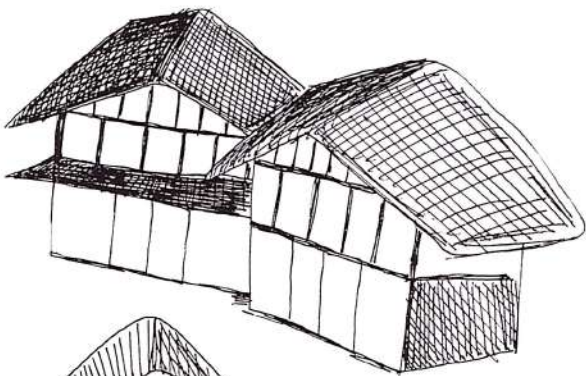
# 追分地蔵

〔北横地〕

毎年7月24日に北横地三区では地蔵尊まつりが行われているんやわの。

明治の頃、林忠兵衛さんの子どもが大変不幸な亡くなられ方をしたので二度とこのような事がないよう供養のため建てられたそうやわの。最初は村の中にあったんやけど、誰でもお参りできるようにと現在の位置に移したんやと。

移されたころはお地蔵様だけやったんやけど、南向きにお地蔵様、東向きに





お地蔵様の守護神として火の神、「南天成田山大不動明王天神」様を  
 安置されたんやと。昭和36年7月21日、建て替えられたんやと。  
 余談なんやけど、今の追分地蔵がある三角地は昭和初期頃まで松  
 林があり、馬をつないで休憩所となっていたそうやわの。

## 一里塚

〔北横地〕

一里塚は、太閤検地で計測され建てられたものだそうやわの。  
 当時、泊りがけの検地のため一行40〜50名が大庄屋であった大崎権  
 兵衛さん宅に泊まり大変お世話になったとお礼に黄金虫（金細工）を  
 くださったそうやわの。

人通りが、明治5年に新道ができそ  
 ちらに移ったので一里塚を今の位置に  
 移動されたんやわの。塚自体も工場を  
 建てるために南側を崩し、残り半分に  
 防空壕を作られたんやわの。

その時に壺が発見され、道中弁当を



入れた壺つぼではないかと言われているんやわの。

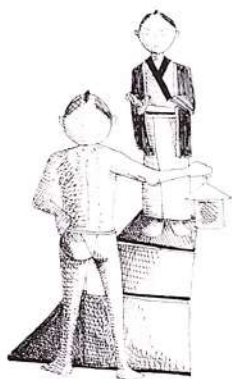


## お侍と表児の米

〔北横地〕

表児の米が歴史上スポットライトをあびるのは150年前の嘉永（西暦1850年頃）年間です。永見兵庫とおっしやるお侍様（福井藩士、300石取り）が祭り見物に見えられました。

永見さまは道石の上に佇んでおられたところ、若者達から「道をあけろ」と罵声を投げかけられ、ひと騒動になります。当時はお侍様に道をあけろと言う方が非常識ですが、天下御免のお許しを得ている若者達にしてみれば当然の事だったと思われます。



ところで道石とは天保2年（西暦1831年）に北横地が公領から福井領になったとき、地区の道に勺谷石（約40cm×90cm）を縦に並

べて敷き詰められたもので、約10枚ぐらい毎に2枚横に並べて敷いてありました。お互いすれ違ふとき2枚並べてある場所で、先に着いた方が相手を待つという風習が残っていました。思いやりの大切さを教えてくれる道でしたが、残念なことに道が舗装されると同時に姿を消してしまいました。ただ何枚かは道路工事中に地中より出できましたので、メモリアルとして住吉神社の祠前に設置してあります。

永見様とのトラブルは両方ともおとがめ無しとなり、また表 児の米が天下御免のお祭りとして再度認められました。

表 児の米の音頭の中に「庄屋殿のかどに、一夜御免の立て札が」というフレーズが有ります。もしかするとこの時の事を唄ったのかもしれない。





## おますさん

〔北横地〕

昔々、布久呂寺というところに大きな大きな恐ろしいおばけ鳥が  
いたんやとの。毎年、田んぼや畑をあらし村人達は困っていたんや。

ある年、そのおばけ鳥が言うには「若い娘を差し出せ。  
そうすれば、田畑を荒しはせん」。そこで、村人達は集まっ  
て話し合ったところ、村一番の別嬪さんの庄屋の娘、お  
ますさんを差し出すことになったんやと。

おますさんは静かに「わかりました」といい、桶の中に  
入り、村人達は泣く泣くおばけ鳥の所に運ん  
だそうな。

おますさんのお陰で翌年は大変豊作となり、



みんな、おますさんに感謝したんやと。

こまったことにこれ幸いと、毎年おばけ鳥は若い娘を差し出せと  
いってきたんやとの。この調子だと村に若い娘がいなくなると、村

人達は困り果てていると、顔中ヒゲだらけの

でっかくてごっつい浪人がふらりと村にやっ

てきたんやと。浪人は、不安げな村人達に

「何があったのか」と聞き、村人が今までの

話をするに「それならばわしが退治してやる

う。なみなみとお酒の入った瓶を用意しな

い」と村人達に用意させ、おばけ鳥退治に出

かけたんやとの。

夜になり、浪人は酒を飲みながら大きな声

で歌っていると、おばけ鳥が現れ、「どちら

が酒が強いのか飲み比べしよう。俺が勝ったら



お前まえを食たべるぞ」というんやと。「望のぞむところだ」と浪人ろうにん。おばけ鳥とりが  
 酔よいつぶれ寝ねてしまったところを、浪人ろうにんが「村むらの娘むすめ達の仇かたき！」といっ  
 て首くびを落おとし、無事退治ぶじたいじし、村人むらびと達は大笑たいへんやうこんだそうやわの。  
 その年としからは娘むすめもいるし、豊作ほうさくも続つづき、村むらは潤うるったんやとの。  
 それから、表ひょうこ児この米こめの特とく殊しゆ神事しんじの翌日朝よくじつあさ  
 早はやく、おますさんを偲しのんで「ますやくます  
 やく」と言いいながら蒸米むしこめを配くばるようになっ  
 たんやとの。

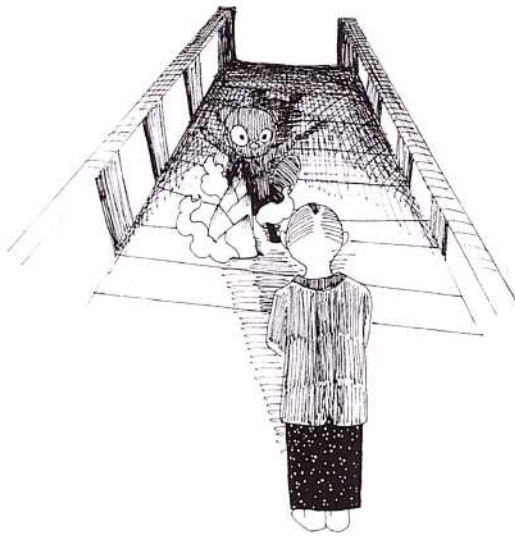


## さらい橋のたけのこ

〔北横地〕

むかし、長崎称念寺の近くの村はずれに、さらい橋といつて人々に  
 こわがられた橋があったんやと。あたり一めんスギやぶで、昼でもう  
 す暗かったんやと。やぶの中にはムジナがすん  
 でいて、夜一人で橋を通る人たちは、よくいた  
 ずらをされたんやと。腰にさげたたばこ入れを  
 さらっていったり、かぶっているぼうしや手ぬ  
 ぐいをとっていったり、お祭りの帰りにごちそ  
 うのふろしき包みをごっそりもって行ってしま  
 うなど、ひどいめにおうたんやと。

ある日、重兵衛さんが、となりの横地の村まで早使いに行つたんや

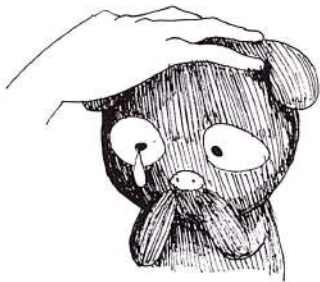


と。急ぎの用をすましてのもどり道、短い秋の日はすぐ暮れて、さら  
い橋にかかると、もうすっかりくろう（暗く）なってもたんやと。  
すると、橋の上にすっと一本の太いタケノコが生えているんにやと。  
「いまごろこんなとこにタケノコが生えるとは、おかしなごっちゃ。  
しかも、橋のどまんなかによう生えたもんじゃ。さては、ムジナの  
たずらじゃな。よし、こうしてやるぞ。」

気の強い重兵衛さんは、少しもおどろかないで、つかつかとタケノ  
コに近づくが早いか、着ていた羽織をぬいで、ぱっとタケノコにかぶ  
せて、すっぽりと包んでしもたんやと。

そして、その包みをしっかりわきにかかえてかけ出したんやと。  
うちに帰るとすぐに、その包みを土間にある重いうすの  
中に入れてふせておいたんじゃと。

包みの中のタケノコは、やっぱりムジナが化けたもの  
やったんやの。出られんようになったムジナは、クンクン



悲しそうになきはじめたんやと。

あくる朝、この家へ仕事にきた大工さんが、このなき声をきいてかわいそうになり、「ひと晩じゅうごろしめたんにやで、もうかんべんしてやってくんなさい。よう言い聞かせてやりますで。」

と、重兵衛さんにたのんだんやと。そしたら、  
重兵衛さんは、

「そうか。そんなら大工さんにめんじてはなしてやるか。」

大工さんは、ムジナの頭をなでて言い聞かせ、  
外へはなしてやったんやと。

それから、さらい橋で、ものをさらわれ  
たり、いたずらされたりすることはなくなっ  
たんやとの。

